

普及活動情勢報告（平成18年9月分）

安芸農業振興センター 農業改良普及課

情勢報告

青色申告会員みんなで認定農業者に！



経営の現状は？
そして5年後の目指す姿は？

J A土佐あき安芸市青色申告会は、「会員の認定農業者率を100%に！」を目標に活動している。9月11日に赤野支部、14日に中央支部の講座を開き、その中で、認定農業者の申請に取り組んだ。関係機関（当センター（普及課・企画調整）・市役所・J A）の担当者も多数参加し、経営改善計画書の作成支援を行った。さすがに日頃の経営管理意識の高い青色申告会だけあって、5年後の経営改善目標をきちっと持っている農家が多かった。

結果、新たに23名が申請、3名が後日申請となり、会員110名中95名（認定率62.7%→86.4%）が認定農業者になることとなった。今後とも、簿記・税務以外の経営改善に関する様々な活動が展開できるよう、助言・指導していく。

奈半利町で漬物試食会を開催する



漬物試食会

奈半利町大原・西ノ平集落の農家17名が、9月11日に公民館で、7月に加工したナスやスイカの漬物の試食会を行った。同集落ではスイカ12ha、施設ナス40aなどが栽培され、後継者も多い。振興センターでは集落営農体制をつくるため、中山間直接支払い制度を推進しており、商品化をめざした加工活動なども支援している。

当日は加工品4品の求評を行い、「ナスのわさび漬け」や「しば漬け」が好評であった。今後の加工・販売計画を話しあった結果、「しば漬け」などの材料にリュウキュウを加えたり、ナスの石実の加工なども研究していくことになった。

学校教育と連携して農村の空間整備



奈半利町大原・西ノ平集落の農家21名は、9月15日に学校教育と連携し、加領郷小学校の小学生と先生約20名と一緒に、集落の空いた農地70aにヒマワリとコスモスの種まきをした。これは、中山間直接支払いの集落協定の中で、農村の多面的機能を増進する活動として小学生に咲いた花の収穫等を予定していたものであるが、振興センターが種まきからの連携を提案し実現したものである。

当地区は田園空間整備事業実施地区でもある。今後、これらの花が盛りとなる11月ごろに、小学生を招いて花祭りを開催し、地域産物のナス料理や加工品を囲みながら、地域との交流を持ちたい。また花の販売もしてみたいなど、意見が出始めたので、さらに支援していく。

黄色粘着資材を利用したコナジラミ類対策



コナジラミ類防除の合い言葉は、
「幸せの黄色い粘着版」

振興センターでは、今作のコナジラミ類防除対策として「防虫ネット（0.4mm 目）、黄色粘着資材、定植時の粒剤」の使用を 3 本柱に、指導を行っている。なかでも、黄色粘着資材の使用については、JA 広報誌に張り方のモデル図を掲載し、また複数の地区に展示圖を設置するなどして、重点的な普及に取り組んでいる。

生産者の関心も次第に高まり、ハウス団地内のあちこちに黄色く染まったハウスが見られるようになった。また、幹線道路からも目に付くため、他品目の生産者や、新聞社からも問い合わせを受けている。

今のところ、黄色粘着資材の使用を含めた「3 本柱」の防除効果は高く、この体系に自信を深めている。今後は、黄色粘着資材の継続使用とまだの人に使用を呼びかけていく。

安芸市で認定農業者制度の説明会を開催



野菜価格安定制度の見直しにより、担い手育成・確保が重要な課題となった。そこで、ナスとピーマンの指定野菜産地である安芸市では、担い手協議会を開催し、その対応を検討した。出荷場単位で、生産者を集め、制度の見直しと認定農業者制度について説明会を開くことを決めた。かわきりは9月20日、穴内出荷場。14戸の農家が集まった。説明の後、5年後の農業所得500万円以上、労働時間2000時間以内を目標とした経営改善改善計画の作成について個別に支援した。今後は、7カ所で、新たに約90戸の認定農業者を育成する計画である。

安芸市入河内伝統野菜「入河内大根」の育成



安芸市入河内地区では、地大根「入河内大根」が伝わっている。今でも、自家用に細々とつくりつないでいる状況である。そこで、「この入河内大根を後世に残し、広く販売したい」（総会資料）と、住民有志と関係機関により「入河内大根のこそう会」が結成された。

9月11日に、現地検討会を開催し、圃場を巡回し、生育状況を確認した。今後は、「昔ながらの入河内大根」の選抜や、食べ方の工夫などにとりくむ。

カラーリングユズの出荷に向けて、検討会を開催



今年は生育が遅れ気味のため、実物だけでなく写真も交えて出荷に適した果実の着色度合を説明した。

JA土佐あき柚子部吉良川支部では、9月20日、カラーリングユズの青果出荷に向けて、目慣らし会を兼ねた出荷検討会を開催した。

カラーリング処理の体系について理解を深めた上で、柚子玉の生育ステージの違いやコハン症・傷などがカラーリング処理の成否に大きな影響を与えることを説明して、出荷玉の品質を揃えるよう呼びかけを行った。

農家も実物や写真を交えた説明に納得していた。

今年は果実の肥大が遅れ気味のため、本格的な出荷は当初計画より少し遅れて10月にずれ込む見込みである。